

い作品を見ながら自分自身のものを生み出していく)をやった。その頃から世の中に倦んできたような感じがしてきて、感覚的に世の中がたるんできた、行き詰まったというような気がして、構成派のあとは何が出るだろうかと自分の仕事で考えた。そして、平面では昔のもの、松や梅を自分のものとしてこなして行こうとした。立体では疑問を持ちながらも手箱や硯箱を作っていた。

卒業後の五年間は、お盆を塗ったり文庫を制作したり、父の手伝いをしていた。また、帯留に蒔絵をしたら、皆和服を着ていた頃のこと、少しずつ売れた。景気が少しは良くなって展覧会の作品もたまには売れた。その内に議事堂の仕事(壁面、扉、皇族室や演壇などの室内装飾漆塗り)が学校に委嘱された。その仕事を手伝いに来ないかと学校から言われて、六角紫水の弟子の佐藤さんと自分と二人が試作に雇われて学校の教室の一部で試作した。段々その仕事が忙しくなって学校の方の教える手が足りないから、一応見本が出来て工作順序の見当がついたから、教室の方へ行くように言われて辞令を貰ったら、東京美術学校助手を命ずる、但し向う一カ年とあった。今でいう非常勤助手ということだったが、翌年も向う一年と来て、また卒業した時と同じような手板を諸君に教えて四、五十年経った現在でもそれをやっている。

磯矢は昭和十一年に助教、同二十二年に教授となり、東京芸術大学発足後も同四十六年まで在職する。

## ⑤ 小堀鞆音の死去

「学校近事」(498頁)にも記されているように、昭和六年十月一日、帝國美術院会員、帝室技芸員、本校教授小堀鞆音が死去した。各紙がこれを報じるなかで、翌二日の『都新聞』は次のように伝えている。

### 小堀鞆音翁逝く

大和繪界の明星殞つ

絶筆となつた「山田長政」

現代大和繪界の巨星小堀鞆音翁は過般來病氣で、市外駒澤新町の自邸に引籠り去月廿一日の帝國美術院總會にも缺席療養に努めて居たが一日早朝病俄に革まり遂に午前十時逝去した。行年六十八歳である、翁は栃木縣安蘇郡旗川村の生れで、家は世々畫師であつた、明治十六年二十歳にして上京し、當時故實の大家として聞えた川崎千虎翁の車坂の塾に入り、大和繪の研究に心を潛め傍ら有職故實を研究し、盛名を馳するに至り、東京美術學校の創立さるゝや助教となり校長岡倉覺三氏の退職するや共に辭して第一期日本美術院の幹部となつた、文展が創設せられてからは、審査員として活躍し、帝國美術院の創立されるに至りその會員となつて今日に至つた、その間の傑作としては「櫻町中納言」「雄圖」「武士」「公武六曲屏風」「定朝の神技」などの大作があり、なほ晩年の大作では明治神宮繪畫館に酒井伯爵奉獻の「廢藩置縣」が此程完成した。同館の壁畫にはなほ三井家奉獻の「二條城太政官代行幸」と東京市奉獻の「東京御着輦」を畢生の事業として揮毫する意氣込みであつたが、此の二作は遂に完成に至らず、絶筆は荒木

十畝氏からの勧誘で暹羅に於ける日本美術展の爲めに揮毫した、「山田長政」であつた、なほ門下には安田鞆彦、川崎小虎、磯田長秋、尾竹國観、伊東紅雲、川船水棹氏等（が）である。

また、同日の『時事新報』は次のような正木直彦の談話筆記を掲げている。

小堀君は、年も一番上であり日本畫壇の長老であるが二十五周年記念を行ふ此秋の帝展を前に控へて亡くなられたことは、返す／＼も残念です、小堀君は明治二十九年美術學校の助教教授になつたが三十年（三十二年）に辭し、その後私が四十一年教授に呼び迎へて今日に及んだ次第で二十五年間美術學校に勤續されたことになつてゐます、同君は美術學校教授であつた故實家で畫家の川崎千虎門で、鎌倉時代の大和繪を狙つてゐた、それで同じ大和繪と云つても吉川靈華、松岡映丘等の大和繪とは違つて太い線を用ゐて居た、川崎千虎門である關係上同君も非常に故實に詳しく鎧の手入などさへ自分でやつてゐた位です、若い時は仲々面白い逸話もあつたそうですが年を取つてからは非常に無口な人でした

この談話にもあるとおり、鞆音は鎧の研究にかけては第一人者で、晩年は主にその研究に精力を注いだ。昭和四年十二月二十日の『都新聞』を見ると、四領の鎧と並んだ鞆音の写真が大きく掲げられており、解説にそれらの鎧は石清水八幡の鎧、敵島の重盛着用の鎧、甲州神田天神の小桜おどしの鎧、武州御嶽山の宝物畠山重忠着

用の緋おどしの鎧の復元模造で、鞆音門下の磯田長秋、伊藤紅雲、小山栄達、丹波緑川の依頼で鞆音が故実研究の蘊蓄を傾けて図面を描き、谷中の鎧師小野田光彦に製作を依頼して数年かけて完成させたことが記されており、その傾注ぶりが窺われる。

#### ⑥ 正木直彦の帝国美術院長就任

正木直彦校長は大正八年の帝国美術院創設に大きな役割を果たし、以来森鷗外、黒田清輝、福原謙二郎ら歴代院長のもとで幹事をつとめて来たが、昭和六年十一月二十五日に院長に就任した。同院と本校との関係は、同院創設以来会員の半数近くを本校教官が占めて来たことにも示されているとおり、極めて密接であつたが、正木の院長就任によつて更らに親密の度が増すことになった。なお、教授矢代幸雄は正木のもとで同院幹事をつとめることになった。

#### ⑦ 白浜徴銅像除幕式

昭和六年四月八日、工芸部校舎の師範科手工教室玄関前に白浜徴（同三年死去）の銅像が建立され、除幕式が行われた。『東京美術学校校友会月報』第三十卷第一号にその模様が記録されている。それによると、大正十五年四月の白浜徴還暦祝賀会で銅像建設の議が持ち上がり、原型を水谷鉄也が製作、津田信夫が鑄造して昭和二年に像が出来上がった。それは校内に保管されていたが、錦巷会の尽力により校庭に建立することになり、あらためて水谷鉄也設計の台石が作られ、像が安置されたのである。銅製パネルの「故白浜徴先